

## セッション・タイトル「社会研究所と批判理論の100年（1）」

司会者：日暮雅夫（立命館大学）  
報告者：入谷秀一（龍谷大学）  
吉田敬介（法政大学）  
田畠真一（北海道教育大学）  
討論者：大河内泰樹（京都大学）

本セッションが目指したものは、批判理論の初期の志向性を確認しつつ、現在の現実の光の中でそれを再構成し今後の展開の可能性を探ることであった。本セッションは、それを三人の批判理論研究者の報告と討議によって行った。会場での参加者は20名弱であった。討論者からは、「批判理論はそもそも今日、可能なのか？」という根源的な問い合わせられた。それについては、批判理論が新たな討議を引き起こす限り生命力を保っていると考えるしかないのではないだろうか。以下、各報告についてである。

入谷秀一（龍谷大学）「権威主義2.0？——他者なき他者依存のメカニズムについて」

トランプに代表される現代の権威主義者は、価値の内面化と自己規律性を特徴とする古典的な「父」とは異なり、他者による承認に依存したり、自らを特定の他者（敵）によって傷つけられた被害者と見なしたりすることで、同じような被害者意識を持つ大衆の怒りや不満を動員することに成功する。そしてこの倒錯した自己像の活用は、まさにヒトラーが得意とした扇動戦略でもあった。ところで、アドルノらが権威主義的性格の指標と捉えた九つのF尺度のうちの「投射」は、負の感情を「敵」や社会的マイノリティに転嫁するという点で、この倒錯の本質を捉えていた。さらにアドルノによれば、近代の合理化・同一化のプロセスそのものが、市民の欲望の抑圧と慢性的な不満を生むのだが、それだけではない。この不満は「悪しき平等主義」によって標準化され、外部の例外者への憎悪として広く大衆に分配されてしまう。つまり彼らによれば、例外的に「より多く享樂する他者」への嫉妬こそが、反ユダヤ主義などを作動させるのである。その意味で、権威主義者の抱く、非同一的な例外者への病的嫌悪は、標準化や平等の理念といった近代合理主義が生み出したものもある、とさえいえるのかもしれない。

吉田敬介「美的なものをめぐる批判理論の自己省察——Chr・メンケによる主体と美的経験の関係の問い直し」

本報告では、美的なものの考察である美学を、批判理論の自己省察として理解する試みがなされた。その際まず、M・ホルクハイマーと Th・W・アドルノにおける批判理論の出発点に社会的存在としての主体の自己省察があること、こうした自己省察としての「主体における自然の追想」を範例的に可能とするのが美的経験であることが、確認された。さらに、Chr・メンケにおいてこうした美的経験を理論化する領野が「美学」として理解されること、そして「美化 Ästhetisierung」の二重の働き方の検討が主体の解放に通じることが、明らかにされた。その上で、A・ヴェルマーの議論が参照され、美学が、批判理論それ自身の自己省察の展開として理解されうることが主張された。

質疑では、美的経験のもつ身体性や「苦痛」をめぐる論点、その社会性や社会的媒介をめぐる論点等について、応答がなされた。こうした論点を通して、批判理論における美学の系譜においては、個人と社会の関係が、身体的な否定性の経験において解釈されうることが示唆された。既存の言説を脅かしうる身体的な否定性の経験に定位するような美学の理論が、批判理論においてどう位置づけられるのか、今後さらなる考察が求められる。

#### 田畠真一「批判理論とポストコロニアリズム——R・フォアストにおける正義の批判理論を中心に——」

R・フォアストが、「正当化の権利を各人に保障する正統化の基本構造の要請」を基底に置いた正義の批判理論を展開していることを、A・アレンとの論争を参考点に、明らかにした。検討では、フォアストの議論が、論争において論点となった「サバルタン問題」については十分に応えられておらず、彼の理論がポストコロニアリズムの観点から問題を抱えていることを示した。ただ、この問題から、フォアストによる「正当化の権利」という考えが全て意味を失うわけではない。報告では、認識的不正義論で解釈的不正義として捉えられる解釈資源の格差を手掛かりに、正当化の権利を補完する制度編成の必要性について論じた。具体的にはN・フレイザーがサバルタン的公共圏として定式化した閉じた場での言説資源の蓄積や解釈コードの複数性を擁護することの重要性を示した。討論者の大河内会員からは、そもそもフォアストの議論は、ハーバーマスなどの先行世代の議論と異なるものなのかという点、またサバルタン問題は解釈資源の格差に還元できるのかという点が質問された。ハーバーマスとの違いは、正当化への着目によって理由という次元に焦点が当てられるようになったこと、還元できるのかについては、還元はできないが、サバルタン問題を構成する大きな部分ではあり、報告では応答可能なこの部分に絞ったことをそれぞれ説明した。